

優秀賞

嫌いだった父

小樽商科大学 商学部 1年 佐藤 琉星

私は父が嫌いだった。家事をしないで部屋に閉じ籠っているくせに、事あるごとに家族に対して怒鳴り散らす。早くこの家を出たい。どこか遠い大学に行って一人暮らしをしたい。その一心で受験勉強を頑張った。

結果は第一志望の大学が不合格で、実家からほど遠い大学に進学することになった。念願の一人暮らしは叶ったが、少しも嬉しくない。第一志望に落ちた悔しさだけが心を埋め尽くして、大学生活に期待する余裕が無かった。親は自分のことを出来損ないの息子だと言うだろうと思った。しかし、父は不合格の時は何も言わず、合格の時は「頑張ったな。」と久しぶりの笑顔を見せた。

引越しの前日、父は自身についての話をした。父は、親の経済状況を考えて大学進学を諦めていた。今でも大学に行きたかったという思いは消えていないのだという。そこで経済的理由によって、自分の子供の進路の選択肢を狭めたくないと考えていた。そのことが仕事に励む原動力になっていたそうだ。お前の進路決定を無事に済ませることができて、一つ夢が叶った。と、父は私に笑った。私が努力していなかったら、大学に行けていなかったかもしれない。今までの努力は無駄だったと思っていたが、父の笑顔を見るとそうでもないことに気づかされた。他人を喜ばせることは、自分の喜びでもある。父から逃げするための努力によって父の願いが叶えられたのは複雑だったが、とにかく自分を肯定できて涙が止まらなかった。

翌日、私は実家を出た。父は仕事のため見送りには来なかった。だが、父が家を出発する時に、私に向かってぽつんと呟いていた。

楽しんでこいな。

私はこの父の願いに応えてやろうと思っている。いや、これは父の願いではなく私の願いに変わっていた。気がつけば前向きに未来を考えるようになっていた。